

人間・環境学研究科

ないとうえいいち

内藤栄一 助手

今回は自らを「研究アスリート」と呼ぶ若武者、内藤栄一助手にサッカーのこと、スポーツ実習のことなどを訊いてみました。そのエネルギーが、あなたに火をつける！（おーたちち）

先生はサッカーで国体に出場したこともあるということなので、サッカーに関する話を聞かせてください。

長野の上田高校ってとこでセンターフォワードをやってたね。2年生のころ、県の国体代表選手を決めるトレーニングセンターっていうのに呼ばれて、県代表になれた。だけど、国体自体は全国に行く前の北信越予選のところで負けてしまったんよ、新潟県に。忘れもしないんだけど、神田勝夫（現アルビレックス新潟DF、元日本代表）っていうのが新潟にいて、最後にそいつのフリーキックがものすごくきれいなカーブを描いてポストに当たって決まって、それで負けちゃった。残念ながら。

あと、その県代表チームで、ブラジルのクラブのユースチームと戦ったことがあるんだよ。コテンパンにやられた。スピードからテクニックまで、ぜんぜん違った。ぜんぜんボールに触らせてもらえなかった。それまでは遠征に行っても群馬とかで、たいしたことなかったから天狗になっとるわけやん。静岡とかすごいところに行ったことなく、カズとかゴンといったすごい人に会ったことがなかったわけ。それで、彼らとやっても同じぐらいできるんじゃないかって勘違いしてたわけよ。実際にやってみたら話にならなかったと思うけど。

筑波大学から推薦の話もあったけど、もうオレはサッカーでは大成しないと思った。すごい人は違うんやなと。神田勝夫の曲がったシュートとブラジルのユースチームに決定的にそう思われた。

先生はスポーツ実習を担当されていますが、それについて聞かせてください。

授業していると結構面白いんだけど、例えばドリブルなんかさせると、みんな独特のリズムを持ってるんだよね。オレは人の動きの研究をしているんだけど、みんなの動きを見てると、「こういうのはどういう風に脳が制御してるのか」とか「どうい



脳のメカニズムによって、こういうものが起こるのかな」といったことに興味を引かれるね。今やっている研究は、脳が動きに関してどう認識しているかということ調べてることなんだけど、どのようにしたら運動の苦手な人が得意になるかとかまでは今はまだちょっとわかってないんだよね。脳の研究から得たものを使って、そういうのができればすごいだろうなとは思っただけだね。

スポーツ実習はもちろん授業だからちゃんとやってもらいたいんだけど、サッカーとずっと付き合っていくという出会いを用意できればいいと思う。単位もらいたいっていうのだけじゃなくて、サッカーって面白いなと思ってもらえれば。将来、暇なときにどっかからボール持ってきてサッカーのまねごとでもするとか、そういう風になってくれればいいなと思う。

そうは考えているんだけど、実際に授業に出てくる人が少ないのは、しょうがないんじゃないかな。絶対にとらなきゃ卒業できないっていうわけじゃないから。でも、朝イチで起きるのが大変だけど、あの授業行くとサッカーをすごく楽しめる、と思われものにはしょうと考えているけど。

授業中オレがシュート撃つのがやり過ぎだって言われるけど、あれはしょうがないね。もうフォワードの性やね。だけど、かなり抑えてるんだよ（笑）。以前は、全部撃ってしまえっていう勢いだったから。結局さあ、本気でやるのが一番面白いのよ。オレが本気でやって、つい15分前まで寝てたんだろなっていう顔してる人たちがその雰囲気の中で面白いと思うようになってきて、だんだん動くようになってくれば、いいだろうと思ってる。



（文・1 誰からもメールが来ない）
（空を飛ぶものは飛行機以外食べる編）

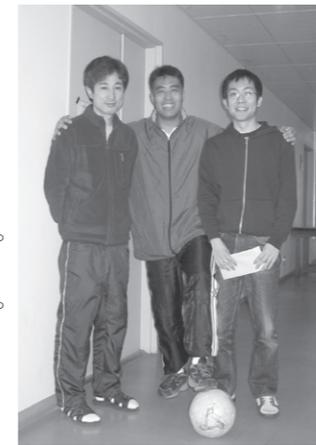
私たち学生のスポーツへの関わり方について、意見をお聞かせ下さい。

やっぱり適度な刺激と楽しさがないとスポーツって続かないから、絶対やれとまでは言わないよ。だけど、西洋の人たちと比べてみて、日本の人はスポーツを「楽しむ」という感じが違うと思うな。自分のレベルっていうものをすごく気にする。すぐに競技志向になりすぎてしまう。だから、そういうのを気にして、スポーツを純粋に楽しみたいんだけど飛び込めないっていう人が多いね。楽しみたいから何かやる、というようなことが大事なんじゃないかって気がするよね。例えば、オレも研究室の人とよくリフティングとかやってるんだ。研究室にボールもあるわけだし。サッカーなんか1回もやったことない人でもやっているうちに、ものすごくうまくなっちゃうてるの。できるようになるとどんどん面白くなってくるし。

ところで、助手というのは教授や助教授に比べて私たちにあまりなじみがありませんが、普段どのようなことをなさっているのですか？

普段の生活はねえ、基本的に学生さんと一緒に実験をやったり、データの解析をしたりとか、それがもう8割9割ぐらいじゃないかな？ ほとんど研究。助教授や教授の先生より研究の占める割合は高いと思うよ。

もちろん教授や助教授のパシ리적인こともするよ。けどまあ、それを言ってもしょうがないし、京大はいいと思うよ。大学によっては、「助手は虫けらや」、はっきりと言われることもあるようだよ。とにかく、「人にあらず」という感じに扱われると聞いた。で、これが現実社会なんだなあと思ってた。だけど、京大ではそんなこと全然ない。



内藤助手の歩み

- 1966年：長野県上田市生まれ
- 1984年：国体長野県代表選手に選出
- 1991年：京都大学教育学部卒業
- 1996年：博士（人間・環境学）取得
岐阜大学医学部助手
- 1997年：スウェーデン、カロリンスカ研究所に留学
- 1999年：京都大学総合人間学部助手
- 2003年：人間・環境学研究科に合流

サッカーだけでなく、スキーも達人。全日本スキー連盟準指導員・クラウンプライズ。

はみだし
すてーじ

鉄路を用いて愛知の実家へ帰省。往路が16時間半、復路が63時間かかった。
⇒その鉄道への愛に拍手!!!

先生のこれからの希望を聞かせてください。

世界的な研究者になりたい。それだけやね。脳の運動制御の研究って言われたら、世界で名前を挙げてったときに手の指から数えて足の指に行く前までに名前が出てくるぐらいの研究者にね。そして、オレのやるのが200年ぐらい経たんと役に立たんとかじゃなくて、比較的すぐ役に立つような研究をしたい。

例えば、リハビリへの応用を少しずつ始めてるんだ。ギブスとかをはめると、その関節が動かないような錯覚に脳がとられることがあるんだよね。動かないって思い込んでいるところっていうのは、非常に動かしにくいことがあったりするし、ひどい場合は動かすという感覚を忘れちゃうってこともあるわけ。だけど、バイブレーターで刺激してやると、ゆっくりと動いているような感覚を作ることができて、関節が動いているっていう鮮明な印象を頭に入れ込むことができる。動かしにくいっていう人に対して、動かすための感覚のヒントを入れてあげられる。実は素晴らしいことに今年スウェーデンで行われる、ノーベルシンポジウムってやつに招待されて、この振動刺激のやつを発表することになったんだよ。



▲振動刺激の実験の様子

京大生へのメッセージをお願いします。

京大生は何をやるにせよ、言われたことをやるのはすごく長けてるんだけど、自分で何かを見つけてきて、自分で何とかしようっていうのが難しくなってきたんじゃないのかっていう気がするね。あまり小さくまとまらないで、自分の行く道っていうのを決めて、それで世界を目指してほしいなあと思う。やる気だよな、やっぱり気合、根性、執念、意地とかそういう類の言葉が大事だよ。諦めずに、夢を持って頑張る、その夢っていうのをなるべく大きく、目指すんだったら世界を目指して。夢を諦めたら終わり。ひよっとしたら自分へのメッセージかもね（笑）。まあ、それがオレを頑張らせてるんだろけど。

—— ありがとうございます。

（経・1 D-G.Sheera）
（63時間あれば世界一周できると思う編）